

令和四年気良歌舞伎

寿曾我対面

【役名】

曾我五郎時致

曾我十郎祐成

小林妹 舞鶴

近江小藤太成家

八幡三郎行氏

化粧坂少将

大磯の虎

梶原平三景時

梶原平次景高

鬼王新左衛門

工藤左衛門祐経

大名

(幕開き 浅葱幕の前に大名並ぶ)

大名一 当家の主祐経殿は

大名二 頼朝公のお覚えめでたく

大名三 この鎌倉の大小名

大名四 星の如くある中で

大名一 選り出されし一臈職

大名二 今日のまどいに参りし我々

大名三 最早祝儀の時刻なれば

大名四 あれなる席へ連なつて

大名一 憎まれ口でも

皆々 ききましようか

(大名下手に移動)

工藤 園の梅 今を盛りに鶯の 声も香りも 逢いに逢うたり

(浅葱幕落とす)

工藤 今日こんにった祐経が 一臈職いちろうしやくを賜りて 富士の御符ごふの総奉行そうへいぎやう 重き役目を蒙りて わが幸運を祝さんと 声かけまくも太平

の 困こ豊とよかなる 御代の春

朝比奈 千歳ちとせ寿とせぐ丹頂たんちやうの 鶴はゆつたり舞い上がり 悦ぶ空に今日ここへ 鶴に逃れぬ朝比奈が 三臈方さんろうがたのその席へ 連なる

祝詞の 天窓あまのまど敷

景時 この梶原も共々に 輝く御代の鎌倉山 今日こんにの晴着はれぎの大紋だいもんに 心も勇む春霞はるがすみ

景高 素襖すおの袖をひらめかし 末広すえひろがりの末長く 松の緑の青々と 日頃願ひごろねがいし 芽出めだし時

近江 変わらぬ春の新玉に 飛び出す海老の潔く 跳ねた奴との お叱りなく

八幡 結ぶ実栄もだいたい 栄うる枝葉 子持筋 柿は吉例色 袴

大磯虎 お顔揃いのその中へ 祐経さんのお招ぎ受け 心うき立つ初東風に 誘われ来たる大磯の おこがましくも太夫職

化粧坂 続いて来連れし不束者 諸分もいまだ 白梅の

大名一 その吉兆の辻占も

大名二 取つて四民の目出度年

大名三 事納まつて波静か

大名四 四海をうたう一座の晴れ

朝比奈 その寿の今日の嘉儀

景時 梶原初め一統に

景高 ただただ 只々お目出度う

皆々 存じまする

景時 何はしかれ今日より 一臆職の祐経殿

景高 嘉儀を祝うて あれなる

皆々 高座へ

工藤 ではござれども 高座はあまり恐れあり

景時 祐経殿には何遠慮 一臆職を賜る上は

景高 とくどく

皆々 高座へ

工藤 然らば おのおの

(工藤二重舞台より降りる)

工藤 いずれも様 高座こうざ 御免下さりましょう

(工藤高座へ。朝比奈、大磯虎、化粧坂二重舞台より降りる。大名二重舞台へあがる)

朝比奈 さてこれからは祐経どんへ 折り入って頼みがある 外じゃあねえが 常々から頼んでおいた 二人の者に 逢ってやっ  
ちやあくんさるめえか

工藤 外ならぬ 小林が頼みとあれば

朝比奈 逢ってやっつくんさるか

工藤 いかにも

朝比奈 そりゃあ近頃かつちけねえ さらば二人を呼び出すべえか

お次に控えし二人の者 変わらぬ春の吉例に 祐経どんの赦しゆるを受け 願いも叶うた上からは 急いでこれへ  
五・十 かしこまってござりまする

(花道より曾我兄弟)

景時 待て待て待て 何といずれもお見やったか あれに見慣れぬ二人の若者

景高 万歳まんざいなれば後のは才蔵さいぞう

大名一 笠もかぶらず のそのそと

大名二 我々共も憚はばからず

大名三 行儀作法ぎようぎさほうも知らぬ奴

大名四 みるから形なりも そがそがと

大名一 貧乏じみた胴どうぶるい

大名二 がたがたものでこの処ところへ

大名三 出てきた二人の あの形はなり

大名四 みじめな様ではござらぬかさま

景高 何と お父つあん 吉例の通り 一つ笑おうか

景時 おお 笑え笑え

皆々 ハハハハ

朝比奈 これやかましいわえ あれなる二人は祐経どんへ この小林がかねてより 頼んでここへ 連れてきたのだ

大磯虎 朝比奈さんのお取り持ちで お目見得叶うたお二人さん いかにか吉例なればとて 色恋知らぬ憎まれ口めみえかの いろこい

化粧坂 その様なこと言わしやんと 烏がお灸をすえるぞえからす

大磯虎 ちと おたしなみ

大・化 なさんせいなあ

工藤 すりゃ かねて小林が 頼みありしは あの者よな 遠慮に及ばぬ これへ これへ

朝比奈 何と 聞いたか二人の者 一臆職の祐経どんが 逢つてやろうとおっしゃるほどに おめず 臆せず 恥じらわず 急

いでこれへ のたくりつん出るえ

五郎 参りますすべえ 参りますすべえ

十郎 おお これ 必ず粗相のないようにせそう

五郎 合点だがってん

(五郎・十郎、内へ)

工藤 今 小林が取り持ちにて 間近く来たりし二人の若者 はて誰やらに 似たわ似たわ

十郎 似たとは誰に

五・十 似ましたな

工藤 我いっけに一家の因みある 河津すけやすの三郎祐康に

五・十 何と

工藤 思い出せば おお それよ

安元二年神無月 十日あまりのことなつしが 佐殿すけをなぐさめんと 伊豆相模の若殿すけやすばら 奥野の狩の帰るさに

十郎 赤沢山の南尾崎 柏ヶ峠かしわがとうげの半腹はんぶくに 人や待つとも 白月毛しろつきげの 駒うまにまたがり祐康すけやすが

工藤 しかも その日の出立は 秋野の摺すりつたる狩衣かりぎぬに 千段藤せんだんとうの弓たずさえ

十郎 竹笠たけがささつと木枯こがらしに吹きそらし

五郎 絶所ぜつしょ悪所の嫌きらえなく しんずしんずと 歩ませたり

近江 待ち設けたるこなたには 椎しいの木三本小楯きさんぼんこだてにとり 一ひとのまぶしは 小藤太成家ことうだなりいえ

八幡 二ふたのまぶしは三郎行氏さぶろうゆきうぢ 切きつて放はなてばあやまたず

工藤 河津かづが乗のりつたる駿足の鞍くらの 山形射やまがたけずつて むかばきの着際きぎわより 前まへへすつぱと 射通すてしたり

五郎 万夫不当ばんぶふたうの祐康すけやすも 大事だいじの痛手いたでに たまり得えず

十郎 馬うまよりどうと おちこちの 露つゆと消きえたる 赤沢山あかざわやま

工藤 その祐康すけやすの面差おもぎしに もしや おことら兩人は

十郎 かく お目立ちまする上からは 何をか包かまん我々われわれは 河津すけやすの三郎祐康すけやすが 忘れ形見わすれがたみの 二人ふたりの兄弟

工藤 兄いちまんの一万成長いちまんなし

大磯虎 祐信すけのぶさんの養子やしとなり

十郎 曾我そがの十郎 祐成すけなりと申まをしまする

工藤 弟箱王はこおろ 人ひとなつて

化粧坂 北条きたじょうさんの 烏帽子えぼしご児こにて

五郎 曾我の五郎 カ、カカ・・・時致ときむね

工藤 さてこそ兄弟

十郎 くどうさえもん  
工藤左衛門

五・十 すけつね  
祐経殿

工藤 はて珍しき

三人 対面じやなあ

五郎 親の仇かたき 祐経観念すけつね

十郎 ああこれ 立ち騒いで尾籠びろうな弟 急せいては 殊ことに大事の前 ただ何事も 兄に任せて

五郎 でも

十郎 じつと辛抱しやいのう

五郎 いやだ いやだ 堪忍袋かんにんぶくろの緒が切れた

朝比奈 やれ待て兄あにい早まるな 悪いことは言わねえから うんと言って止まってくれい 一番止まってくんさるなら ありがとう

なすび  
茄子の初夢だわさ

(五郎戻る)

工藤 親の仇かたきと祐経を つけ狙うとは愚かな時致 河津は角力すもうの遺恨にて 俣野またのが討ちしということは 犬打つ童わらへも知ること

く 祐経討ちし覚えない

五郎 やあ 覚えないとは卑怯な祐経 親の仇と名乗れえ

近江 やあ 尾籠びろうなるわつばしめ 押し黙しつて聞いていりや 主人しゅじんに対し仇呼かたきばわり

八幡 当時出頭しゅつとう第一の 祐経様へ慮外りよがいの一言いちごん

近江 おそばには近江おうみの小藤太ことうだ

八幡 八幡やわたの三郎 付き添いおれば

近江 どっけへ

八幡 そっけへ

近・八 やりやあしよねえ

工藤 兩人控えい

近・八 はあ

工藤 元は近しき一家いっけといい 小林が手引きの兩人 必ず粗相 申すまいぞ

朝比奈 その言葉に祐経どんへ 甘えすぎたことながら 春の初めとしだまの年玉替わり

大磯虎 これに控えし お二人さんへ

化粧坂 どうぞ あなたの

大・化 お盃さかずきを

工藤 ほかならぬ二人が頼み いかにも祐経 盃さかずきくりよう 近江おうみ 八幡やわた 銚子ちょうし 土器持かわらけて

近・八 かしこまってござりまする

(近江・八幡、盃を工藤へ。次に大磯虎が盃を十郎へ)

工藤 そのかみなれば 祐成すけなりへ差し申そう

十郎 頂戴いたすでござりましょう

(化粧坂が銚子を持って十郎に注ぐ。十郎飲み干して大磯虎が盃と三方を置きなおす)

工藤 五郎へ

五郎 なんだ

工藤 盃さかずきくりよう ずずずと参れ

五郎 頂きますべえ 頂きますべえ

十郎 必ず粗相そそうのないように

五郎 合点がってんだ

今日はいかなる 吉日きちにちにて 日頃逢あいてえ見てえと 神仏かみほとけをせがんだ甲斐あつて 今逢あうは優曇華うとんげの花待ち得たる

今日の対面 三ヶさんがの莊の福は内 鬼も 十八年来の 今吹きけえす天津風あまつかぜ 盃頂戴さかずき 仕つかまつるでござろう

(化粧坂、盃を注ぐ。五郎盃を投げる)

工藤 勇ましきその振る舞い 父を討たれて無念なか

五郎 さん候そうろう

工藤 口惜くちやくしいか

五郎 さん候そうろう

工藤 さもそうず さもありなん しかし無念に思うても 鎌倉殿のお覚えめでたく一臆職いちやくしやくを賜る上は 三ヶさんがの莊の大々名おほおほな

連るる時には千騎せんき千騎せんき 連れざるとても百騎ひゃくき二百騎にひゃくき この袴経はかまのけいへ刃向かい立ては 及ばぬことだ 叶わぬことだ

五郎 うう・・・

(五郎見得みえ)

工藤 それのみならず 先立まへだちつて紛失まぎれなしたる友切丸ともぎり 祐信殿すけのぶのへお疑うたがいかりやつながるおことら兩人 鎌倉殿かまくらのの 囚人とりこ同然どうぜん

十郎 すりや友切丸ともぎりの

五・十 出でざるうちは

工藤 叶かなわぬことだ

五郎 むうう・・・

(花道に鬼王出る)

鬼王 しばらく しばらく しばらく 紛失なせし友切丸 手に入りましたござりまする

小林 何 友切丸が

皆々 手に入りしとな

鬼王 曾我の家臣 鬼王新左衛門 これまで持参 仕つてござりまする

小林 おお新左衛門でかした 急いでこれへ

鬼王 陪臣の身も顧みず 真つ平御免下さりませう

(鬼王うちへ)

鬼王 憚りながら祐経様 いざ御披見下さりませう

(八幡、友切丸を受け取り工藤へ)

工藤 これぞ誠に友切丸

十郎 再び手に入る上からは

五郎 祐経仇と名乗れえ

工藤 あいや今は叶わぬ 時節を待て

五郎 やあ時節を待てとは 卑怯な祐経

工藤 卑怯にあらず 臯月下旬 富士の御狩の総奉行 役目終わらぬ その内は 私の敵討ちは 叶わぬことだ

大磯虎 時節を待てと祐経さんが

化粧坂 事をわけたる あのお言葉

小林 ここは一番 おつ堪えろ おつ堪えろ

十郎 すりや 富士の御狩の総奉行

鬼王 役目終わらぬそのうちは

五郎 宝の山へ入りながら 手を空しく帰るのか 兄者人あにじゃひと

十郎 弟

五郎 ちえ 忌々しいなあ

工藤 ああいや手を空しくは帰すまじ 今日対面のその印 些さし少なれども年玉代わり

十郎 こりやこれ狩場かりばの

五・十 二枚の切手

工藤 切って 恨みを晴らせよ兄弟

五・十 言うにや 及ぶ

小林 まず それまでは

工藤 祐成すけなり 時致ときむね

十郎 工藤左衛門くどうさえもん

五・十 祐経すけつね殿

工藤 裾野すそので逢おう

三人 さらば

(幕)

